



**佐野** 女子800メートルで銀の人見絹枝は毎日新聞記者。水泳平泳ぎ金の鶴田義行は報知新聞所属でした。1964年の東京大会では在京各新聞社の運動部長が全員組織委員会の委員で、広報担当の報道室長は共同通信の秋山如水でしたからね。オリンピックとなるとスポーツ新聞よりも一般紙のほうがはるかに熱くなるし、新聞社には自分たち支えているという意識があると思いますね。

**玉木** 歴史的に見た日本のメディアとスポーツの関係はよくわかりました。が、2度目の東京オリンピックで頂点に達したその深い関係を、私はこのあたりで変えなきゃならないのではないかと思っています。オリンピック以外の高校野球やプロ野球とメディアの関係も。

**佐野** その意見には僕も、なるほどそうだなと思います。このままメディアが率いていても新聞の部数減は目を覆いたくなるレベル

だし、テレビもネットメディアやSNSとの関係で、若者のテレビ離れに直面しています。そんななかでスポーツビジネスの根本問題が東京大会で表面化したわけですね。

**玉木** 元電通の高橋治之氏への賄賂疑惑や談合問題ですが、オリンピックアナリストの春日良一さんに言わせると、それらは前時代的なやり方で、世界のスポーツ界は、代理店との癒着や特定の人物の暗躍は過去の問題と断じています。そのような体質を批判するべきメディアが、ジャーナリズムとして機能できなかった。

**佐野** メディアとスポーツ界の未来を考えれば、オリンピックでも今後は「挙国一致」でなく、メディアがいろんな立ち位置をとるべきだと思いますね。過去から続く協力関係を継続するメディアもあれば、そういう協力関係から離れて批判的なメディアもある。善し悪しは読者や視聴者が判断すればいい。

**玉木** 私は、もう協力関係というのはすべて解消すべきじゃないかリンピックのほうが、けっこう反対意見も健全に飛び交っていたように思われます。

**佐野** スポーツを批判するのは簡単なんです。文化だとかなかなか、そこまでの批判はでない。スポーツ庁の来年度予算は350億円程度。中学の部活動のアウトソーシングに要求した100億円も削られて、1500億円レベルの文化庁と比較しても少なすぎる。軽く見られているのではないかとすら思います。

**玉木** 図書館の建設には反対意見は出ないけど、スポーツ施設の反対意見が必ず出る。

**佐野** そういう認識を作ってしまったのも、メディア自身かもしれません。

**玉木** スポーツライターの小林信也さんから聞いた話ですが、コロナ禍で窮地に立った高野連がクラウドファンディングでお金を集めようとした。ところが全然集まらなかった。多くの人々が、お金が足りないなら朝日新聞社が出すべきだと思ったでしょうね。

**佐野** 近い将来のことを考える

と思います……。  
**佐野** それも、ひとつの考え方でしょうね。

**玉木** たとえばアメリカのメジャーリーグは創立以来、メディアは球団を所有しないという不文律があります。だからCNNのテッド・ターナーがアトラクタ・プレーブスを買収したときも、CNNの所有でなくターナー個人のものとなった。またツール・ド・フランスという世界的人気の自転車レースを創ったのはレキップというスポーツ新聞だけど、主催はフランス自転車協会に委ねた。そこでメディアのジャーナリズムとしての矜持を保ったのですよね。だから日本も……。

**佐野** たとえば、箱根駅伝は関東学生陸上競技連盟の主権。高校野球も日本高等学校野球連盟の主権という形です。

**玉木** 一応、体裁は整えていますが、新聞社も共催という形で加わっているうえ、クロスオーナーシップで新聞社とテレビ局が資本でつながっているので、日本では箱根駅伝や甲子園大会が新聞・テ

レビのマスコミあげての大騒ぎとなり、そこに批判的なジャーナリズム精神はほとんど働かない。クロスオーナーシップは、メディアの巨大化と多様な意見を妨げることから禁止している国も多く、我が国も法律で禁止すべきだと思いますが、法律を作る代議士先生たちもメディアと喧嘩をしたくないから、そういう意見は出にくい。

**佐野** ジャーナリズムという観点から見ればその通りでしょうが、法的には難しいでしょうね。新聞社は株式会社であっても、資本による報道の自由への介入を防ぐため上場はしていない。けどテレビ局はほとんどが一部上場会社で、産経新聞は別ですが、新聞社のほうから資本が入り、クロスオーナーシップとなったわけです。ただ、テレビは放送法で縛られた許認可事業ですから、それを盾にとった規制は考えられます。

**玉木** 国によるテレビ局に対する介入は、報道の自由の観点から問題になるでしょうが、私はテレビや新聞が報道の自由を主張して国

と、新聞もテレビも変わらざるを得なくなっています。新聞は部数減から全国紙でも維持が難しくなり、業態変革が起きると思います。休刊・廃刊となる新聞が出るかもしれない。新聞社の内部では、どの新聞社もいろいろ頑張っている。新しい記事を出そうと努力はしています。たとえば産経ではアトラクタ大会の頃からだったかな、オリンピックに対する見方を変えようという企画で、「五輪の中の世界」という名のコラムを掲載しました。オリンピックは単一競技の大会ではないから、何らかの競技で参加できる小さな国があることに着目しよう、政治や外交、国際経済の側面からみてみようという記事作りを試みました。

産経に限らず各社いろいろ試みていますが、結局、勝った負けたの結果論、金メダル何個獲得といった報道から脱しきれないところはあります。

**玉木** 読者の要求かどうかはともかく、先月号の私の連載『今月のスポーツ批評』にも書いたのですが、22年の報道写真展の宣伝で最

も大きく取りあげられた報道写真が「村神様56号」で、スワローズの村上選手が王貞治さんの記録を抜いたことがウクライナ戦争より大きく扱われているのだからね。

**佐野** 平和惚けかもしれないけど、村上選手の方に関心が行ってしまう。寂しいですね。

**玉木** しかもサッカーW杯の写真も北京冬季オリンピックの写真も、ゴールを喜び合っているシーンとか表彰式で泣いている写真で、スポーツの瞬間をとらえた写真がない。

**佐野** 原稿でも、焼き肉食ったからホームラン打ったというような原稿があるけど、そんな原稿書いてたらダメですね。勝敗の結果に関しては完全にネットメディアが早いわけですから、新聞に求められるのは勝敗に対する分析、批判、批評、評論のはずです。

**玉木** 要するにAIには書けない原稿を書き、また話すということですね。

**佐野** そうです。一次的な報道原稿は今の時代AIに任せればい



**玉木** スポンサーを降りず東京オリンピックを推進する立場のま

ま、菅総理にオリンピック中止を考えたという何だかわけのわからない社説を載せた。確かに信濃毎日と西日本は頑張ったかもしれないけど、いかんせん少数派で、64年の東京オ